

Title	哀悼
Sub Title	Professor Miura and Professor Higuchi, a eulogy
Author	佐藤, 朔(Sato, Saku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1964
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.18, (1964. 9) ,p.87- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00180001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

哀 悼

佐 藤 朔

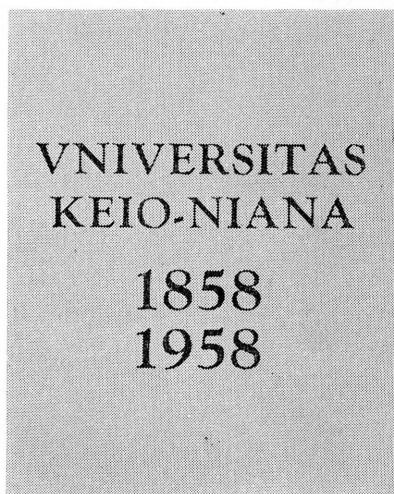
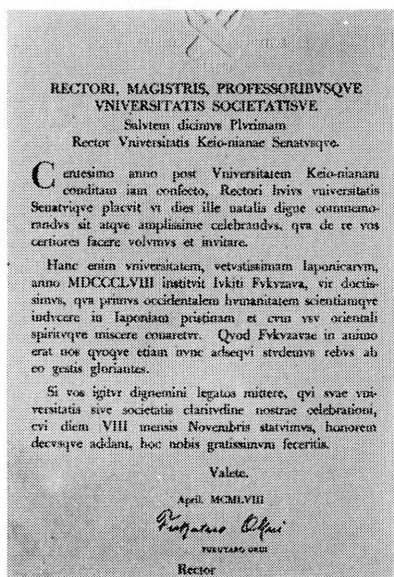
三浦孝之助、樋口勝彦の両君を遽に失ったことは、まことに痛恨の念に耐えない。両君はともに慶応義塾大学英文学科にほぼ同時代に学び、卒業した。三浦君は故郷に帰って教師となり、樋口君は大学にあって教鞭をとり、それぞれ専門の分野において研究をつづけ、困難な戦争の時期を迎えた。戦後になって樋口君はますます学界に重きをなし、三浦君も母校に戻って教鞭をとることとなった。ともに経済学部教授として活躍している最中に、踵を接するように他界し、私としては古くからの学友を同時に失った。悵然たる想いに駆られざるを得ない。

三浦君は西脇順三郎先生の指導を受け、学生時代から先生の文学的影響を受けるところが最も多く、その発想法やその文体にまで、それがよく現れていた。同君は、学者的というより詩人肌であり、日常の言行において、また教育・研究の態度において、飄々としていながらつねに文学に対する若々しい情熱を失わず、晩年にいたるまで文学青年の面影を残していた珍重すべき存在であった。若い頃に興味を寄せたイギリスの作家エリオット、ジョイスなどの作品を、最期まで愛しつつ、折にふれてその研究の一端を発表していたが、まだその豊かな教養と水々しい詩心を十分に文筆によって表現することなくして逝去した感が深い。青年時代から同君を識る者と

して、無念に思うこと切りである。

樋口君は、やはり西脇先生に学んだ一人であるが、特にラテン語、ラテン文学に長じ、故前田越嶺先生の高弟として、出藍の誉が高く、その精緻で深奥な学風には、さすがの師匠も一目を置かざるを得なかったほどである。わが国では、数少ないラテン学者として夙に名を知られていたが、樋口君にはまた風流隠士の趣きがあった。酒を汲みながら、その愛好するキケロやホラチウスの一節を朗々と唱して、古典文学を語り、人生、文学、芸術の諸問題について雅致のある感懐を洩らし、聞く者を陶然たらしめ、また警拔な観察を下して、相手を愕然たらしめることがあった。樋口君は、格調正しく高雅なラテン文を書き、別掲の慶応義塾百年祭に際しての海外諸大学へのラテン文招待状は彼の筆になる名文であるが、私としては巷の小酒亭にあって、時の移るのを忘れて、その学殖の豊かさを示す清談に耽ける彼の姿が忘れ難い。惜しい人物を失したものである。

今、茲に三浦、樋口両君の論文と照影、さらに年譜と年表を掲げて、両君の学風を偲ぶ機会を得たが、原稿の掲載について角川源義氏と木村徳三氏より、ご高配を得たことを感謝する。(一九六四年五月)



慶応義塾百年祭に際しての海
外諸大学へのラテン文招待状